１．活動のテーマ

＜テーマ＞

動き　１歳児
～投動作の発達と空間認知の形成　（投擲・方向調整・拾得・しゃがみ動作）～

＜テーマの設定理由＞

神経系の発達が著しく、基本的な身体操作や運動機能が急速に形成される重要な時期である。特に「投げる」「狙う」といった動作は、日常生活の中では経験が不足しやすく、意図的な環境設定によって育てていく必要がある。本園では、子どもたちが主体的に身体を動かしながら、楽しさの中で運動経験を積み重ねられるよう、遊びを通した運動活動を重視している。その中で、緑色のマットや滑り台を活用した傾斜環境と、とげとげブロックを用いた「的当てゲーム」を設定することで、投動作や距離感、方向感覚を自然に引き出すことをねらいとした。また、本活動は単なる運動技能の習得にとどまらず、「当てたい」という目的意識のもとで繰り返し挑戦する経験を通して、試行錯誤する力や達成感を味わう機会となる。さらに、友だちの動きを参考にしたり、同じ遊びを共有したりする中で、社会性や協働性の育成にもつながるものである。
加えて、本園では外部専門機関であるレッカーズの運動指導を導入しており、専門的な視点による基礎運動能力の向上と、日常保育における遊びの中での実践とを相互に関連付けながら取り組んでいる。本活動は、その日常的な運動経験の一環として位置付けられるものであり、専門的指導と保育実践を接続する役割を担っている。
以上のことから、遊びを通して基礎運動能力と非認知能力の双方を育成することを目的とし、本テーマを設定した。

２．活動スケジュール

年間計画の策定
月間実施（５月～３月）
指導日当日の振り返り
職員会議での振り返り（月１回）
学期・年度末評価
６月から１２月まで活動を展開　主に１歳児で開催

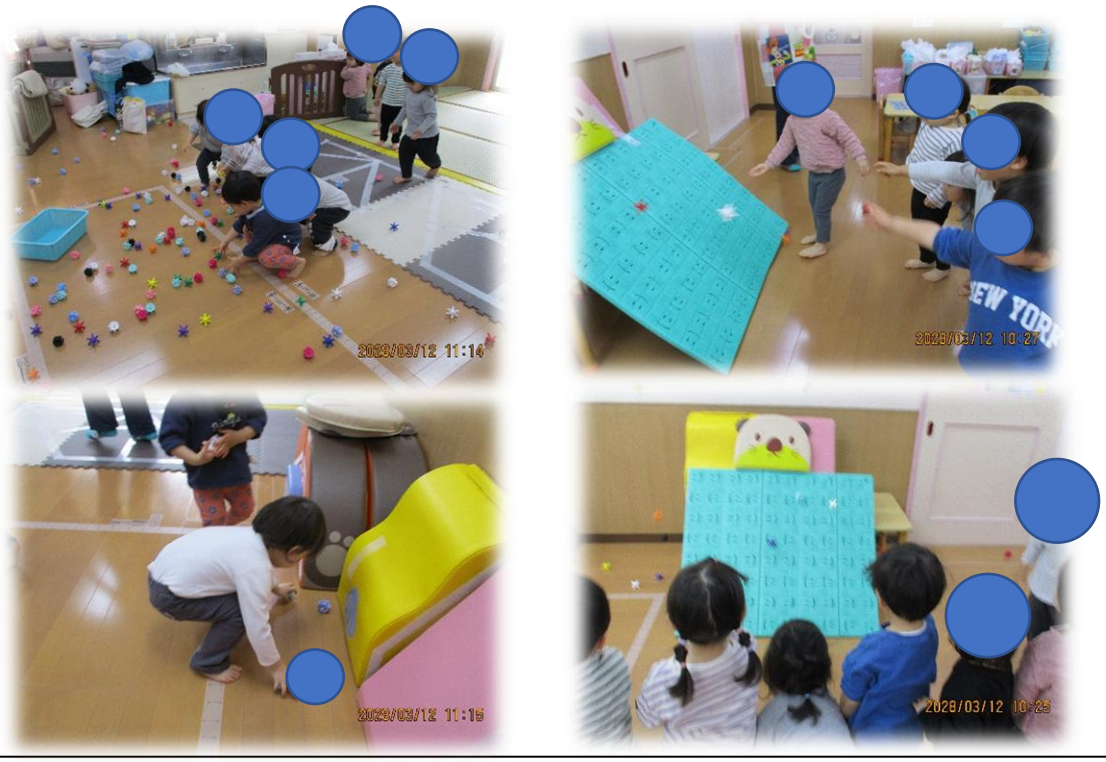
３．探究活動の実践

＜活動の内容＞

・活動のために準備した素材や道具、環境の設定

緑色のマット、らっこ滑り台、とげとげブロックを使用し、「的当てゲーム」を実施
らっこ滑り台にマットを立てかけて傾斜を作り、そこに向かってとげとげブロックを投げる環境を設定した。また、床面にもブロックを散りばめ、拾う・投げる・運ぶといった複合的な動きを引き出す構成とした。
活動は、個々のペースで繰り返し挑戦できるようにし、遊びの中で自然に投動作や身体操作が経験できるよう工夫した。
＜活動中の子どもの姿＞
・床に散らばったブロックを拾い、マットに向かって投げることを繰り返していた。
・はじめは近い距離から投げていたが、次第に距離を取って挑戦する姿が見られた。
・狙った場所に当たると喜び、何度も繰り返し挑戦する様子が見られた。
・友だちの様子を見て投げ方を真似て、同じ場所を狙おうとする姿もあった。
・拾う・しゃがむ・立つ等の一連の動きを繰り返す中で、全身を使った活動となる。

本活動を通して、以下の育ちが見られた。
① 身体面
・投げる動作の経験の増加　・全身を使った動きの活性化
・姿勢保持やバランス感覚の向上
② 認知面
・距離や方向を意識する力の芽生え　・試行錯誤しながら方法を変える姿
③ 意欲・非認知能力
・「当てたい」という目的意識　・繰り返し挑戦する姿勢
・成功体験による達成感
④ 社会性
・友だちの動きを参考にする　・同じ遊びを共有する一体感
投動作の獲得（肩・腕の協応動作）
目と手の協応（ハンドアイコーディネーション）
距離感・方向感覚の形成
体幹の安定（立位・しゃがみ動作の反復）
また、傾斜のあるマットを用いることで、的に変化を持たせ、子どもが試行錯誤しながら投げ方を調整できるようにした。



4．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

本活動を通して、子どもが自分の姿に興味を示し、繰り返し鏡を覗き込む姿が見られたことから、視覚的な刺激による探索意欲の高まりが確認された。また、表情や動きの変化に反応する様子から、自己への気づきの芽生えが促されていると考えられる。
一方で、個々の発達段階によって関心の持ち方に差が見られるため、今後は設置方法や高さ、角度などを工夫し、より多くの子どもが関わりやすい環境づくりが求められる。
引き続き、子どもの主体的な探索を大切にしながら、安心して取り組める環境と保育者の関わりを充実させていきたい。